

ラフカディオ・ハーンの友人, A.E.ルーケットとG.W.ケイブル —ルーケットのケイブル批判の小冊子を中心に—

梅本 順子

Junko UMEMOTO. Lafcadio Hearn's Friends A.E. Rouquette and G.W. Cable: the Case of the *Critical Dialogue between Aboo and Caboo on a New Book; or, A Grandissime Ascension*. *Studies in International Relations* Vol. 35, No. 1. October 2014. pp. 55 – 62.

In this article I would like to supplement the previous one I wrote, in which I traced the friendship of Lafcadio Hearn and George Washington Cable, by discussing the Creole poet-priest Adrien-Emmanuel Rouquette and the booklet he wrote attacking Cable: *Critical Dialogue between Aboo and Caboo on a New Book; or, A Grandissime Ascension*. Published anonymously in 1880, this work was filled with Rouquette's enmity toward Cable himself as well as Cable's novel *The Grandissimes*, published earlier that same year. A supporter of the Union during the Civil War, Rouquette staged a curious volte-face against Cable in the *Critical Dialogue*, with the accusation that Cable's novel was written for the North. While why Rouquette turned against Cable is still a matter of debate—they were both close to Hearn and had formed a more than casual acquaintance themselves, all three sharing interests in Creole culture and literature—my article traces the impact wrought by the booklet with its inventive use of French Creole and English.

はじめに

本稿は、ラフカディオ・ハーンが(Lafcadio Hearn, 1850-1904)が交友関係を待った二人の人物に関する拙稿二篇(「ラフカディオ・ハーンとジョージ・ワシントン・ケイブル: 「クレオール」の文学の視点から」と「ラフカディオ・ハーンと『新アタラ』: 宣教師ルーケットとの交流を中心に」)¹⁾を補完するためのものである。ケイブル作品に対し、非常に手厳しい批判をしたルーケットであるが、その背景にあるものは何なのか。ルーケットの半生に触れた伝記、並びにルーケットによるケイブル批判の小冊子を資料として用い、批判の実態に迫る。

ニューオーリンズに滞在していた十年ほどの間に、ハーンは、ニューオーリンズ出身の作家ジョージ・ワシントン・ケイブル(George Washington Cable, 1844-1925)、ならびにフランス系クレオールの神父で、やはりニューオーリンズ出身のアドリアン・エマニュエル・ルーケット(Adrien-Emmanuel Rouquette, 1813-1887)のそれぞれと、限られた

期間ながら文学を中心に交流を深めた。それぞれが文学で身を立てたいと思っていたハーンにチャンスを与えてくれたのであった。だが、ルーケットとの交流は、ケイブルが出版した『グランディシム一族』(*The Grandissimes*, 1880)をルーケットが酷評したことで一変する。ケイブルを支持するハーンは、ルーケットとの付き合いを断ったのだった。

ルーケットはカトリックの神父であったにもかかわらず、当初、ハーンはルーケットを評価していた。後にキリスト教を毛嫌いだといわれるハーンだが、ニューオーリンズ時代においては、聖職者を区別するようなことはしていない。それどころか、ルーケットの人種を意識しない寛大な行動に対し、魅力を感じていたのである。ニューオーリンズ郊外に住んでいたアメリカ原住民であるチョクトー族の中に分け入って、彼らと生活を共にし、仲間を意味するような「チャータイマ」(Chahta-Ima)という称号さえもらうほどのルーケット神父の行動に、ハーンは心を動かされた。

ニューオーリンズ時代のハーンは、社会派の記

者として過ごしたシンシナティ時代とは異なり、文学を中心に活動できるという感触を得ていた。そのようなハーンにとって、アメリカ原住民の村で布教をするかたわら、執筆にいそむ型破りなルーケットは、教えを乞いたい人物の一人と考えられる存在になっていた。ルーケットに対しては、一時的にしる、尊敬の念さえ抱いていたのである。

とくに、新聞社で文芸関係の仕事を任せられるようになっていたハーンであったが、自分が書いたものが本に掲載されるという経験をしたのはルーケットの好意によるものだった。ルーケットの書いた『新アタラ』(La Nouvelle Atala, 1879)という作品についてハーンが書いた書評に気を良くしたルーケットが、自著の印刷のおり、その末尾にハーンの手評を入れて出版してくれたのである。先に触れた拙稿、「ラフカディオ・ハーンと『新アタラ』」で、この件については触れたので、詳細については省略するが、当国際関係学部所蔵の『新アタラ』の末尾にもハーンの手評が掲載されている。

そのようなルーケットとの蜜月時代も、ケイブルが『グランディシム一族』を出版した際の、ルーケットによる激しいケイブル批判を受けて、終わりを迎えることになった。ケイブルに傾倒するようになっていたハーンにとっては、ルーケットの度を越した批判は到底許せなかったことだろう。ルーケットが出版した、ケイブルを酷評する小冊子『新本に関するアブーとカブーによる批判的な対話、もしくはグランディシム昇天』(Critical Dialogue between Aboo and Caboo on a New book; or, a Grandissime Ascension, 1880, これ以降は『アブーとカブー』と呼ぶ)は、単なる辛辣な批判という域を越えていると先行研究⁽²⁾で言われてきたものの、その詳細についてはあまり触れられなかった。

そこで、今回、ケイブル批判のこの小冊子を介してルーケットとケイブルの対決の様相をたどる。ルーケットからの一方的な非難であってケイブルの反応はわからないものの、混血クレオールないし黒人クレオールに対する二人の見解の決定的な相違が見えてくる。

また、この冊子を理解するうえで不可欠なのが、

ルーケット神父の歩んだ人生、並びにその文学についての思想である。ルーケットの数奇な人生に迫ったルブルトン(Dagmar-Renshaw Lebreton)による詳細な伝記(*Chahta-Ima: The Life of Adrien-Emmanuel Rouquette*, 1947)に基づき、南北戦争を挟んで数十年にわたる期間のルーケットの思想の変遷をたどる。

ルーケットの半生と思想について

1813年に、フランス系のクレオールとして、ニューオーリンズに生まれたアドリアン・ルーケットの一家は、1819年に大黒柱の父が亡くなると、ニューオーリンズの中心より二マイル離れた郊外に居を移している。セント・ジョン湿原といわれるその地域で過ごした幼少年期、一年を通してアメリカ原住民と触れあう機会があったという。このような経験が、のちにチョクトー族の中に分け入って、生活を共にしながら改宗を勧める活動の原点となった。

そのようなルーケットは、青年時代には、ニューオーリンズ在住のほかのフランス系クレオールの子女同様に、フランスに留学するという経験をしている。当時、フランス系の人々は、1803年にルイジアナがアメリカに譲渡されても、故郷であるフランスとの絆を重視していた。

18歳でシャトーブリアン(François-René Chateaubriand, 1768-1848)の『アタラ』(*Atala*, 1801)を読み、ネイティヴ・アメリカンの少女に惹かれたことが、のちに『新アタラ』のタイトルで作品を書くきっかけとなったのである。ルブルトンは、ルーケットにとって、『新アタラ』は思想と経験すべてをつぎ込んだ「証」(testament)⁽³⁾であったと述べている⁽³⁾。その後フランスにわたって法律家になることを目指すものの、ルイジアナに帰還後、将来に悩む。特に黄熱病の流行で、ニューオーリンズの都市部を離れて郊外に一時的に退避した際、改めて人生を見直す機会を持つことになった。

その後、法律家となるための試験にいとむが失敗し、20代後半で聖職者としての人生を歩み始めた。32歳で司祭となったが、当時はまだ、ルイジ

アナ生まれのものが聖職者になるのは珍しかった。1846年、体調を崩しフランスのパリに一時滞在した後、ニューオーリンズに戻り、聖職者としての勤めの傍ら、詩をはじめとして活発な文筆活動を開始した。

さらに、ニューオーリンズを離れて、郊外の自然が残るところでの暮らしを切望していたルーケットは、1849年にはチョクトー族の村での布教を開始することになった。彼を指導した師は、チョクトーの部落まで行って布教しなくてもニューオーリンズ市内にも、改宗させるべき人はいるとして翻意をうながすものの、ルーケットは聞き入れなかった。ルーケットにとって、大自然が残るアメリカこそ、その布教の対象となるものであった。

人里離れたところでの隠遁生活に憧れた理由の一つには、自由な文学活動を行うということがあった。上司は詩人としての彼の活動に理解がないうえ、同僚との関係もあまり良好でなかった。さらに、郊外の大自然が思索の源でもあったことは、「アメリカこそ、アメリカの詩人にとってインスピレーションの源泉とならなければならない」と主張したことにも明らかである⁽⁴⁾。自然と共に生きるアメリカ原住民とのふれあいの中で、ルーケットの代表作である『新アタラ』は誕生したといえるだろう。

詩人の聖職者として、ニューオーリンズの郊外だけでなく、アメリカ原住民のテリトリーに分け入って布教の可能性を模索しているところで、南北戦争が勃発した。この時ルーケットは、南部の分離独立反対の立場をとった。理由として二つ挙げている。ルイジアナ州のすべてのものが分離独立を望んでいるのではないこと、ならびにルイジアナを愛するのは、アメリカの一部としてのルイジアナを愛することだと考えたからだ。さらに、宗教を愛国心と結びつけ、統一が教会にとって重要であるように、アメリカが分裂することなく統一されていることの重要性を唱えるのだった⁽⁵⁾。

ルブルトンは、ルーケットがルイジアナの分裂に反対したのは、モラルとアカデミズム両方からの立場による発言であり、政治的な考えからではなかったという。また、一貫して国家の結束を唱え、分裂には反対であったと述べている。ただし、

身近なはずの奴隷制度については何ら言及することがなかったことを強調する⁽⁶⁾。北部が唱える国家分裂阻止を支持しながら、奴隷制度については一言もないというあたりが、後にケイブル作品が出版された時の、ルーケットの反応にもかかわってくるのかもしれない。これから二十年ほどたったのち、クレオール一族を主人公にしたケイブルの『グランディシム一族』が出版されたとき、その内容に憤慨して、紙面でのこととはいえ、ケイブル個人に対する異常なまでの攻撃にでたのだった。

その一方で、ルーケットは、ケイブルが自分の作品を讃えてくれた記事を大切に持っていたという。ケイブルとルーケットの関係が良好だったころの一例である。

ケイブルとハーンの両方にとって親しい人物の結婚式に、ルーケットも来ていた。以前より花嫁となる女性の音楽的才能を買っていたルーケットは、それを讃える詩を花嫁に捧げた。それがケイブルの目に留まり、ルーケットの詩を高く評価したケイブルは、新聞掲載の労をとったのだった⁽⁷⁾。

こういう良好な関係が存在したにもかかわらず、ケイブルの書いた一作品が白人クレオールに対して侮辱的だからと言って、敢然とケイブル批判に回ったルーケットの行動は理解できないという。ルブルトンは、南北戦争中はアメリカ全体のことを考えて分離反対の北部を支持したルーケットが、このような行動をとる背景には、クレオールの歴史家の友人のゲヤール (Charles Gayarré, 1805-95) などの存在があるという。また、白人クレオールが維持してきた伝統と価値観が、ケイブルの著作によって挑戦を受けた時、外からの挑戦に全く無防備であったクレオール社会のために一肌脱いだのではないかともいう。ただし、ルブルトンは、こう結論付ける。ケイブルの作品のみならず、ケイブル個人をも攻撃の対象にした『アブーとカブー』のような作品を書いた理由は、伝記上、また文学上のミステリーだとして、これ以上何か文献が見つからない限り、解明されることはないと述べている⁽⁸⁾。

ただ、ルブルトンは、ルーケットのケイブル批判が原因で、ハーンとの交友が断絶したとは言明

していない。この点、以前、拙稿「ラフカディオ・ハーンとジョージ・ワシントン・ケイブル」で取り上げた、ケイブル研究者のアーリン・ターナー (Arlin Turner) などの意見とは異なる⁽⁹⁾。

ケイブル批判の小冊子：『新本についてのアブーとカブーによる対話』

ケイブル批判の急先鋒となった小冊子『アブーとカブー』とは、いったいいかなるものであったのか。これまで、ターナーほかのケイブル研究者によって、非常に悪意に満ちた内容のものであり、ケイブル本人に対するひどい中傷であると指摘されてきた⁽¹⁰⁾。『アブーとカブー』という冊子を書くまでのルーケットの歩みについては、すでに紹介したとおりだが、伝記を書いたルブルトン自身、この小冊子を出したルーケットの真意を測りかねている。

奇妙なタイトルの小冊子『アブーとカブー』の設定や体裁にも触れながら、その内容を紹介したい。わずか20ページあまりの書籍というよりは冊子という体裁だが、そこに込められた批判の筆は辛辣極まる。批判する対象者に関して、名前こそ出していないものの、その名前をもじったり、におわせたりしていることからして、ほぼ名指しの批判とかわらない。しかも、その内容は悪意に満ちており、ケイブル個人に対する攻撃なのである。これと同じようなものを現在出版したら、おそらく名誉棄損で訴えられるくらいのことは覚悟しなければならないだろう。

ちなみに、ルーケットは匿名で出版したそうだが、作者が誰であるかは明白だったといわれる。現在、筆者が手にしたこの冊子は、カリフォルニア大学所蔵の書籍のリプリント版であるため、内表紙は当時のままで、著者名がはいっていないものの、リプリントの際に付け加えられた外表紙には、“Adrien Rouquette” の名前が刻印されている。

この冊子の中には、白人クレオール的心情を代弁していると感じられる箇所がいくつか出てくる。チョクトー族と交わってきたその姿勢に代弁されるように、ルーケット神父は人種にこだわらない、偏見のない人物であったと思われる。そのような

ルーケットだけに、ケイブルが書いた本の内容が、白人クレオールにとって著しく公正を欠くと感じただけで、なぜ作者に対する個人攻撃にまで及ぶのか。とくに、ケイブルを黒人側の人物とした批判には、人種差別的な表現が連なるのである。先にも触れたように、奴隷制度に関してはその態度をはっきりさせなかったルーケットではあるが、この冊子を見る限りは、人種差別主義者という印象を強く植え付けるものとなっている。

この冊子がどのように誕生したかをはじめ、その過激な内容のあらましを、順を追ってみてゆく。(これ以降、文末の丸かっこ中の数字は冊子のページを表すものとする。)

この奇妙な小冊子のもとになる原稿の存在から出版にいたるまでの過程(架空の物語)が、その序文に述べられている。ニューオーリンズ郊外のポンチャトレイン湖のほとりに生えている木の根元で、置き去りにされた、あるいは落し物と考えられる原稿が見つかる。それがこの冊子になったと説明しているのである。では、だれがこの原稿を書いたのかといえば、白人クレオールの二人が交わす会話を、たまたま少し離れたところにいた雑誌記者が耳にし、興味をひかれて書き取ったものだとして述べている。このように、手の込んだ設定のもとで、二人の会話がスタートする。

対話をしている二人には、アブーとカブーという奇妙な名前が与えられている。まず、年長者はアブーといい、ルイジアナがアメリカにフランスより売却されたころの19世紀初頭に生きていた白人クレオールで、数十年を経て蘇ったことになっている。アブーの名称は、アグリコラ・フィジリエから来ており、身元を隠してアブーと名乗ったとの設定である。アグリコラは、ケイブルの書いた『グランディシム一族』で描かれたグランディシム家の家長である白人のオノレ・グランディシムの伯父にあたる人物である。

方や、カブーは、この作品が書かれた1880年という時代を生きる白人クレオールで、二人の関係は、カブーはアブーの末裔にあるとされている。同族のものが現在の状況を憂いながら対話するという設定である。

ちなみに1880年は、ケイブルの『グランディシム

ム一族』が出版された年であり、作品の舞台は1800年代初期のニューオーリンズである。ケイブルの作品中では、アグリコラという人物は、家長のオノレ・グランディシムが一族のプランテーションの奴隷を解放しようとしたときに一番抵抗したのである。この小冊子の中でも、アグリコラことアブーは、フランス系クレオールの子孫を誇りにしている熱血漢とされている。そこで、ルイジアナの地で生きてきたクレオールの名門一族に対する、ケイブル作品の不当な取り扱いにいたたまれなくなって、登場したことになる。

タイムマシーンに乗ったかのように現れたアブーは、ケイブルの白人クレオールについての記述に対し、異常なまでの非難を繰り返す。その根幹には、ケイブルの作品はみんな嘘だらけだということがある。ルーケットはケイブルのことを呼ぶとき冒頭に *Mingolabee* (*Mingo-city* はニューオーリンズのこと) をつける。たとえば、“the disgraceful name of *Mingolabee*, le Chef-Menteur, the Great Liar” (5) とか “a Magnissime *Mingolabee-Romanticist*” (5) のように “*Romanticist*” を修飾する形容詞として、数回登場する。“*labee*” という単語は仏語辞書には見当たらないが、「不名誉な名前」という表現、ならびに後ろについたフレーズから判断すると、「嘘つき」の意味に当たると思われる。「ニューオーリンズのうそつき作家」の意味になるだろう。

これを受けて聞き手のカブーが、初めはなだめるようなふりをしていたものの、その口調は次第にアブーの憤りをあおることとなる。ケイブルの息の根を止めるといわんばかりの勢いで、作品というより、作者のケイブル個人をのしる。毛頭、冷静な批判ではなく、書籍の内容そのものから大きく逸脱して、ケイブルに対する個人攻撃へと転じる。ここまで行くと、言葉の暴力も度を越えているといわざるをえない。

特に、この冊子の作者であるルーケットは、英仏両語を操ったために、この冊子は英語で書かれているものの、アブーの憤りが高まったとされる個所にはフランス語が見られる。また、方言 (*patois*) も若干入る。この対話は最後にカエルの合唱で幕を閉じるといった、悪意と侮蔑の入り交る作品と

なっている。ルーケットがケイブルを批判する理由は、ケイブルの書いた『グランディシム一族』が真実とは程遠い代物であり、ニューオーリンズ在住のフランス系の白人クレオールの名誉を著しく損なわせたということにつきる。

ルーケットがこの冊子を書いた動機、並びにその主張は、「編者の序」とされる部分に集約されている。さらに、本文の冒頭から、対象となるものの名前をだすことなしに一般論を装って、「ひやかし」は、文学や芸術分野での才能を悪用したものであり、忌まわしい疫病といえる」(5) と述べる。さらに「悪い本は人の情に強く訴えかけなければ売れることはないが、ひどく酷評しても、書籍の流通を止めることはできない。病的な好奇心や興味は、審美眼や真実のように繊細ではないからだ」(5) という。さらに、「勇気をもってこの言葉巧みな悪漢の仮面を剥ぎとり、否定しなければならぬ」(5) と訴えているのである。

さらに、「真実でないことは美しいはずがない」と前置きしておいて、「『グランディシム一族』という仰々しいタイトルは『ばかばかしい寓話』でもつけるべきであった」(9) と述べている。歴史でも物語でもないことを強調し、「敵対している偏見を持った北部のために書かれたもの」(9) と銘打つのである。最後は「ルイジアナのクレオールの人々の古い慣習や習慣、礼儀作法や性癖に至るまでを否定し、いい加減に解釈している」(9) と結論付ける。

この議論はさらに続く。カブーに「小説の形をとった歴史ではないのか」(10) といわれたあと、それに答えるかのように、「歴史でもなく、物語でもなく、半部おどけた、半分劇的で、どちらかというところメロドラマ的で、非常に芸術的に念の入った仕事」(10) とケイブル作品を評する。その作者にいたっては、「無遠慮で、浮ついていて、おどけもので、幾分成り上がりのきらいがあり、厚顔だ」(10) という。ケイブルは、「北部の読者に、内容は淫らだが娯楽となるものを提供した」(10) と述べている。そのいやらしさを気に掛けることもないのは、「北部の読者の支持に支えられて、名声も富も得ている」(10) からだとする。

「ケイブル」(*cable*) という単語が、“~ *cable*”

とか“-able” というような接尾辞として言葉を作りやすいこと、あるいは“cable” だけで「綱」や「ロープ」などの意味があることを利用して、言葉を作っている。たとえば、“despi-cable” (10)、とか“impec-cable” (10)、“pla-cable” (20) などがある。「グランディシム」をもじった“Cablississime” (11) を形容詞にして後ろに“romanticist” をつけたものもある。「ケイブル的」とでもいいたいのであろうか。ほかにも、文章の中で用いられたもの(斜体字、並びに表現は本文のまま)がある。“There is in it all something *cabalistic, cabliss, qui accable*…” (12) あるいは“Shall I slack the *cable* until we lose sight of the exultant aeronaut?” (14) のようなものがある。さらに聖書をもじったものとして、“is it not easier much easier, for a *cable*, or a camel, – to pass through the eye of a needle than it is for any one but the most gullible or gulls to ingurgitate the elephant–lies of this Magnissime *Cable’s* erratic genius,…” (18-19) がある。また、「無慈悲とか忌まわしい」の意味で使用した“for this impla-*cable* *Cable* might work evil, and work it *cablissly!*” (20) などとも一例と考えられるだろう。

悪乗りしているのは、この小冊子の批判の対象となっているケイブルではなく、それを書いたルーケットその人だと言えそうである。ただ、ケイブルが『グランディシム一族』で、クレオールが話す言葉に、“patois” と呼ばれる方言を用いていることに対し、不快に思っているルーケットだけに、言語でもってクレオールを茶化そうとするなら、その批判はやはり言語をもって返すということになるだろう。とくに、「ケイブル的」という造語の形容詞に、「悪魔的でいたずらっぽく、日付や行事や場所、事柄、名称、人名などについて勝手に変えてしまうこと」(11) の意味で使用し、さらに、「ケイブル的」(Cabliss とか Cablissime) という形容詞に続く言葉は、「作家、すなわち性格の悪いよそ者でおしゃべりな奴」(11) になるという。真実でなかろうと言葉巧みに訴えられると、作り物の言葉でも大衆を熱狂させる力があるというのが、二人の会話から導き出された見解である。すなわち、ルーケットは、ケイブルの情報源は黒人の女であり、その情報があたかも真実であるかのよう

に作品中で語られているというのである。ケイブルによる白人クレオールの描写には偏見があると考えるルーケットは、ケイブルの小説の情報源となったのが黒人というところに行きつくのであった。

さらに、小説そのものの内容から逸脱して、ケイブル本人に対する救いようのない非難を始めるのであった。ケイブルが小柄で貧弱な体躯であったことから、「小人」ないし、それに匹敵する表現(本文のまま、数字は引用ページ)が続く。“unfledged dwarf” あるいは“grim-humoured dwarf” (15)、“an unfortunate *pigmy - teaser*” (19)、といった具合である。さらには、“Darwin’s typical ape” (13)、“a *polichinel* puppet” (13) という表現さえ出てくる。

また、変幻自在に形を変えるものとして、ケイブルをとらえ、そのようにつかみどころがないのは、「ブードゥ教の力強いグリグリ(お守り)が与えられている」(12) からだという。ブードゥとケイブルを結びつけ、ケイブルがその作品中で作り出した「ブラ・クベが、呪文を唱えると黒い顔をした霊が表れる」(12) と述べている。こうして、黒人や混血のクレオールに熱心な信奉者を持つブードゥ教と、ケイブル本人を結びつけて非難の調子を上げている。しまいには、ケイブルを「黒人のブードゥ教の司祭」(20) とまで呼ぶ始末である。

小冊子の最終部分では、そのトーンはさらに上がり、「ケイブルがブードゥに関係していることを公表する」(21) とカプーに述べさせている。一方、先祖のアブーがそれを押しとどめて、「奴にも母親や姉妹がいることだろう」(21) とたしなめる。そうすると、「奴が小説を書くときに、我々クレオールがどう感じるかということに思いをはせたか」(21) とカプーが問いかける。すなわち、ケイブルは、ニューオーリンズに在住する白人クレオールの心情を思いやることなしに、『グランディシム一族』のような作品を出したのだから、そのようなケイブル個人について何と言おうとかまわないではないかというわけである。ブードゥの魔力にこだわるルーケットは、ケイブルの作品が、出版されたときには、「すでに大半の出版業界の批

評を、魔法で丸め込んでしまったのだ」(21)と結論付けている。

ルーケットによる批判の矛先は、ケイブルが白人クレオール的心情を理解せぬまま、クレオール社会とはこういうものだ、黒人や混血の側の視点から述べていることに向けられている。これまでルイジアナを支えてきたと自負する白人クレオール側のケイブルに対する不満は、やがて激しい憎しみや嫌悪感を生み出すことになったのである。特にケイブルの、人種差別を強化しようとする社会に立ち向かい、黒人や混血クレオールの人権を守ろうとする姿勢は、白人クレ奥ールの考えとは相容れないところであった。

結論としてアブーが述べているのは以下のとおりである。これも言葉遊びがあるので、原文のまま引用する。(18)

In conclusion, let me say that, throughout this fanciful, distressfully dull, sketchbook of "Grandissimes," — the Grandissimest of whom is the author himself, — there is *malice prepense, deep-rooted guilt*. It is an unnatural, Southern growth, a bastard sprout, *un digne pendant de "Uncle Tom's Cabin."* And the more it is lauded by the Northern press and thereby made popular, — (so have I heard from the lips of many,) — the more incriminated it stands before the Southern Areopagus of stern criticism. Northern sympathy and applause, are, impliedly, Southern diffidence and condemnation.

結論として言わせてもらいたい。この空想的で、悲しいくらいにつまらない『グランディシム一族』という作品には — 作者本人こそが中でも最悪なのだが — 意図的な悪意という、根深い罪がある。不自然な南部の発展、蔓延る混血児、『アンクル・トムの小屋』に匹敵する。それに、北部の出版界でもてはやされればされるほど、つまり人気が出れば出るほど — (多くのものの口から聞いたことがあるのだが) — 罪深いものとして、南部の市民の厳しい批判の矢面に立つことになるのだ。北部が共感し、賞賛すればするほど、暗に南部の関心が失せ、批判が

増すことになるのである。

この一節がルイジアナ社会における人種にまつわる問題すべてを物語っているといえるだろう。南北戦争中に北部支持を表明し、進軍してきた北軍にいち早く忠誠を誓ったルーケットであったが、お膝元の事情となると、対応が違っていたということであろうか。

おわりに

これまで、小冊子の内容を見てきたが、ケイブルが『グランディシム一族』によって示した主張と、この小冊子でそれに対抗しようとしたルーケットの姿勢とは、まさに水と油であった。また、それは、19世紀末のアメリカの北部と南部それぞれの姿勢を代弁するものでもあったといえるだろう。

付け加えておきたいのは、ルーケットのみならず、ケイブルのほうにも大きな思想の転換があったことである。すでに述べてきたように、南北戦争中、ルーケットは、北部支持であったのに対し、ケイブルは南部が不利に立たされた南北戦争末期に、南軍の兵士として参戦した経験がある。いずれも、「郷土愛」がその基盤にはあったといわれる。二人とも、ニューオーリンズに生まれ、ニューオーリンズで成長したがゆえといえるかもしれない。

戦後の再建時代を経て、南部が「ジムクロー法」につながる人種差別を強化する過程を目の当たりにしたケイブルは、自分の愛する南部の変わりように怒り、人種差別に立ち向かうことになった。一方、ケイブルの描く白人クレオール社会の描き方に我慢がならないものを感じたルーケットは、白人クレオール社会を代弁するかのようになり、その矛先をケイブル本人に向けて敢然と立ちあがったのであった。その背景には、北部の大義を支持したものの、戦後の再建の過程で、北部からの移民の増加とともに、白人クレオールが追いつめられてゆくという危機感があったからかもしれない。

前回のケイブルを中心に取り扱った拙稿、ならびにルーケットに関する拙稿を補足するものとして、ルーケット神父の半生と、そのルーケットによるケイブル批判に徹した奇妙なタイトルの小冊

子『アブーとカブー』の内容を中心に検証した。

注

- (1) 梅本順子「ラフカディオ・ハーンとジョージ・ワシントン・ケーブル：「クレオール」の文学という視点から 『国際関係研究』Vol.34, No.2 日本大学国際関係学部国際関係研究所, 2014. 梅本順子「ラフカディオ・ハーンと『新アタラ』：宣教師ルーケットとの交流を中心に」『国際関係研究』Vol.23, No.3 日本大学国際関係学部国際関係研究所, 2002.
- (2) John Cleman, *George Washington Cable Revisited* (N.Y.: Twayne Publishers, 1996) 79.
- (3) Dagmar-Renshaw Lebreton, *Chahta-Ima: The Life of Adrien-Emmanuele Rouquette* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1947) 309.
- (4) D.R. Lebreton, 168.
- (5) D.R. Lebreton, 219.
- (6) D.R. Lebreton, 198.
- (7) D.R. Lebreton, 319.
- (8) D.R. Lebreton, 323.
- (9) Arlin Turner, *George Washington Cable* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1966) 102.
- (10) Arlin Turner, 102. John Cleman, 79.